

韓中茶文化交流考

金 明 培*
東亞細亞食生活學會*

A Study on the Interchange of Korean and Chinese Tea Culture

Myoung-Bae Kim*
The East Asian Society of Dietary Life

Abstract

(1) The introduction of tea

According to the history of three kingdoms, tea was introduced to Korea at the period of Sun-Duck Queen of Shilla dynasty, and Dae-Ryeom Kim, the emissary, brought tea seeds from Tang China in 828, and sowed them on Mt. Jiri by the order of the King Heung-Duck, Shilla.

In 1885, The Chosun government took action in transplant 6,000 each of tea seeding from Ch'ing China.

(2) Transmission of schools

As for the type of tea through the history of Korea, it could be characterized as cake-tea in the three kingdoms period, lump-tea in Koryo dynasty and leaf-tea in Chosun dynasty. Those were affected by Chinese tea culture.

(3) Transfer of tea and tea utensils

Kokuryo and Shilla had to import cake-tea from Tang China, and Koryo had to import lump-tea from Sung China, and Chosun had to import leaf-tea from Ch'ing China.

On the other hand, Koryo had to export various tea to Khitai, Chin, Yuan, and Chosun had to export tea Ch'ing China.

And the tea bowl produced in the Sung, such as Chien Chou ware and Chi Chou ware, was also introduced to Koryo.

(4) Suggestion for the promotion of tea industry

The Chosun government were adviced to the exchange of Chosun tea for China horse, by Yang

Ho(楊鎬), General to the Ming expeditionary forces in Chosun, and were advised to engage in foreign tea trade, by Lee Hong Jyand(李鴻章), minister of commerce for the northern sea to the Ching.

(5) Interchange of teaist between Korea and China

It is reported that the Korean teaist was fraternizing with the Chinese teaist, since 9th century.

(6) Characteristics of Korean tea culture

Fashion of tea-culture in Korean were unique, imitative and reconstitutive.

序 論

此の論題の研究目的は、過去に於いて韓国と中国との間で、どのような茶の文化が交流されたかを歴史的に究明するところにある。

ここで取扱う問題の範囲は、三国時代から高麗時代を経て朝鮮時代に至る間に、茶と茶器の授受を始め、茶人の交驩と、茶詩や茶書の及ぼせる影響等を通覧し、遂には韓国茶文化の特性に就いてもふれることにしたい。

今迄、両国間の文化交流に關しては、主に文學史の研究¹⁾は盛行しつつあつても、食品史の方面では故李盛雨教授の〈中国食文化の交流〉²⁾が嚆矢のようだが、茶文化の交流史に關する研究実績は皆無に等しいといえよう。

尚、茶文化交流史の研究には、文獻と遺物の考証によつて考察を進めたい。

本 論

壹、三国時代

一、茶の傳來

韓国の南部に傳承される野生茶は、自生茶ではない中国からの歸化植物である。

三国の中、北にあった高句麗(37 B.C.~688 A.D.)は氣候が茶の栽培に適しなかつたが、新羅(57 B.C.~935 A.D.)と百濟(18 B.C.~663 A.D.)の旧地である全羅南北道と慶尚南道は栽茶地帯

であつた。

(一)、新羅

1、茶の種子

新羅に於ける茶種子の傳播に就いては、正史である〈三國史記〉の興德王三年(828年)条に。

冬十二月(中略)入唐廻使大廉持茶種子采 王使植地理山 茶自善德王時有之 至於此盛焉。

とある。

2、茶の移入

唐茶の移入に關しては、三つの史例を引用する事が出来る。

(1)、漢茗

渡唐留學僧である双溪寺の真鑑禪師(775~850)の碑銘には

復有以漢茗爲供者則 以薪爨石釜 不爲屑而煮之曰 吾不識是何味 濡腹而已 守真忤俗 皆此類也³⁾

とあるから、漢茗、即ち、唐茶の移入されたことが解る。

(2)、孝行の茶と藥

渡唐留學生で、唐の承務郎侍御史内供奉として仕えた崔致遠(857~?)の〈桂苑筆耕集〉は、〈唐書〉の〈藝文志〉に収録されている。

そして、彼の〈謝探請料錢狀〉には

今有本國使船過海 某欲買茶藥寄附家信⁴⁾

とあって、新羅使臣の歸國船便に唐茶を送ったことがわかる。

(3)、唐の聘答品

唐に對する新羅の公貿易は、6世紀から開始され、唐からの輸入品である聘答品の中には茶も含まれていた⁵⁾。

3、茶人の交驩

茶詩を残した唐の有名な茶人で新羅の人に詩文を寄せた例は、かなり多い。

例えば、唐の湖州刺史である杜牧は、〈題宜興茶山〉詩を詠じた茶人であるが、彼は新羅の海上貿易王といわれる張保阜(?~846)の傳記を書いた。

又、《全唐詩》の中には、新羅の人に詩を贈った唐の茶人が多い。たとえ、その詩が茶詩ではないとしても、唐の人は茶詩を吟じた有名な茶人であるから、新羅の人も茶人であつたであろうという蓋然性は高いのである。

《全唐詩》にみえるそれらの詩と、唐と五代人の茶詩を列記すれば次の通りである。

姚合、寄紫閣無名新羅頭陀(八函三册)、〈乞新茶〉等

章孝標、送金可紀歸新羅(八函四册)、〈野客儉煎茗 山僧惜淨牀〉(詩句)

張籍、送金小卿副使歸新羅(六函六册)、送新羅使(六函六册)、贈海東僧(六函六册)、〈茶嶺〉

溫庭筠、送渤海王子歸本國(九函五册)、〈西陵道士茶歌〉、〈採茶錄〉。

皮日休、送新羅弘惠上人(九函九册)、〈茶中雜詠〉

許渾、送友人罷舉歸新羅(八函八册)、〈野確春杭滑 山廚焙茗香〉(詩句)等。

陸龜蒙、和襲美爲新羅弘惠上人撰靈鷲山周禪師碑送歸詩(九函十册)、〈奉和襲美茶具十詠〉。

鄭谷、贈日東鑿禪師(十函五册)、〈峽中嘗茗〉。

徐夔、贈渤海寶真高元固(十一函一册)、〈尙書惠嶼面茶〉。

楊夔、送新羅僧遊天臺(十一函六册)、〈送杜郎中入茶山收貢茶〉。

張喬、送朴充侍御歸新羅(十函一册)、送某待詔朴球歸新羅(十函一册)、送寶真金夷吾奉使歸本國(十函一册)、送新羅僧(十函一册)、送僧雅覺歸海東(十函一册)、送人及第歸海東(十函一册)、〈送陸處士〉。

齊己、送高麗二僧南遊(十二函四册)、〈謝人惠扇子及茶〉等。

このほか、崔致遠は唐の顧況(725~814)からも贈別詩を受けたが、顧況は〈茶賦〉⁶⁾を詠じた茶人であった。

4、地藏法師の空梗茶

尙、《全唐詩》(十二函一册)には、新羅の地藏法師(705~803)が唐の九華山で修道する時に詠じた下記の茶詩が見える。

送童子下山

空門寂寞汝思家 礼別雲房下九華
愛問竹籬騎竹馬 懶於金地聚金沙
添瓶澗底休招月 烹茗甌中罷弄花
好去不須頻下淚 老僧相伴有煙霞

新羅の王子で俗名を金喬賞という地藏法師と空梗茶に就いては、中国の茶書にもみえる。

即ち、劉源長の《茶史》には、

空梗茶 九華山有空梗茶 是金地藏所植 大抵煙霞雲霧之中 氣常溫潤

与地所植 味自不同(中略) 金地藏 新羅国僧 唐空徳間 渡海居九華 乃植此茶 年九十九 坐化函中 後三載 開視顔色如生 昇之骨 節俱動⁷⁾

とある。

又、陸廷燦の《讀茶經》にも、

九華山志 金地茶 西域僧金地藏所植 今伝枝梗空筒者 是大抵煙霞雲霧之中 氣常溫潤 与地上者 不同味者異也⁸⁾

という条が見えるが、若干の異同がある。

ところで、地藏法師の詩句の中で〈烹茗甌中〉

というのは、晩唐の茶人崔珏が〈美人嘗茶行〉で詠じた点茶法を示唆するものであろう。

若しそうだとすれば、唐の段成式が《酉陽雜俎》の〈異国奇聞〉条で書いた新羅の点茶法説話も新羅で研膏茶が飲まれていたことを反映するものかも知れない。

5、百丈清規の伝来

渡唐留学僧である道義禪師は、憲徳王13年(821年)、新羅に南禅を伝えた。

「祖堂集」の〈道義伝〉によれば、道義は784年に入唐して、洪州開元寺の西堂和尚と百丈山の百丈禪師に見えたところ、百丈禪師は「江西禅脈摠属東国之僧歟」といつた。

こういう状況的証拠に鑑み、道義が百丈清規を学んで帰國した可能性は多いといえよう。それでも、百丈清規が遵行された事は麗代の金石文等によって考証される。

例えば、元の危素が書いた普光寺重砌碑には、高麗の圓明国師が龍泉寺の師主たりし時に始めて百丈懷海禪師の禅門清規を行つたと書いてある。⁹⁾

(二)、百濟

百濟の茶に就いては、百濟の文献上では一切徴すべきものがないが、只、朝鮮時代の性理学者である李滿敷(1664~1732)が著わした《息山別集》の〈智異古事〉条には、

余入迎勝南崖産紫芝浙茶 蘇定方百濟之役
以浙江茶種播于智異 至今不滅 其説在邦人所記¹⁰⁾

とある。

(三)、高句麗

高句麗の茶に就いても、文献上では徴すべきものがないが、遺物に関しては、故青木正児(1887~1964)博士の《中華茶書》に、

私は高句麗の古墳から出たと称する、小形薄片の餅茶を標本として蔵しているが、直径四センチ餘りの銭形で、重量は五分ばかり有る。¹¹⁾

と記されている。

式、高麗時代

一、茶と茶具の伝搬

麗代には、中国の茶と茶具が伝搬されたり、高麗の茶が中国に伝搬されたこともあった。

(一)、中国茶の伝来

1、龍鳳茶

北宋の龍団鳳餅茶が高麗に伝来されたのは、文宗三十二年(1078年)であった。即ち、《高麗史》には、

文宗三十二年六月丁卯 今差左練議大夫安
蕙 起居舍人陳睦 賜脚国 信物等
具如別録(中略) 別賜龍鳳茶一十斤 每斤金
渡銀竹節合子 明金五綵裝腰花板朱漆匣盛
紅花羅夾帕複 龍五斤 鳳五斤(下略)

と記されている。

その後、睿宗七年(1112年)条には、「以宋国信龍鳳茶 分賜宰臣」と記されているように、賜茶したことが解る。

又、《高麗史》。〈列伝〉の金仁存条には

今入朝進貢使資謙 寶桂香御酒龍鳳茗團珍菓
宝皿来歸 嘉与卿等 樂斯盛美 臣僚皆惶駭恐
懼 退伏階陛 辞以固陋 不敢于盛札 王趣令
就坐 温顔以待之 備物以享之

とあるから、多分、龍鳳茶も飲まれたことであろう。

この条りは、金縁(1487~1544)の〈清燕閣記〉にも引用されている。

2、双角竜茶

麗初の文人である郭輿(1058~1130)は、睿宗より双角竜茶を賜わってから次のような詩を詠じている。

清讌閣親賜双角龍茶
双角盤龍入小團 蜀山新採趁春寒
俄回御手親提賜 露氣天香蕊一般¹²⁾

3、建溪茗

高麗の相国として仕えた李奎報(1168～1241)が吟じた茶詩には、建溪茗が登場する。

得南人所餉鐵瓶試茶
猛火服悍鐵 剗作此頑硬
喙長鶴仰顧 腹脹咩怒迸
柄似蛇尾曲 項如兕頸癭
窪卻少口甄 安於長脚鼎
我無文園才 徒得文園病
唯思喚酪奴 已止中酒聖
雖無揚江水 幸有建溪茗
試呼平頭僕 敲汲寒冰井
埽爐手自煎 夜闌燈火爛
初如喉聲哽 漸作筆韻永
三昧手已熟 七勒味何并
持此足爲樂 胡用日酪酏¹⁵⁾

4、蒙頂芽

又、李奎報が吟じた次の詩には、蒙頂茶がみえる。

訪巖師
我今訪山家 飲酒本非意
每來設飲筵 顏厚得無訛
僧格所自高 唯是茗飲耳
好將蒙頂芽 煎卻惠山水
一甌輒一話 漸入玄玄旨
此樂信清淡 何必昏昏醉¹⁶⁾

(二)、高麗図経の茶と茶具

睿宗が薨逝された時の弔問使節として、仁宗元年(1123年)に高麗の松都を訪ねた北宋の国信所提轄人船礼物、徐克(1091～1153)が著わした《宣和奉使高麗図経》の〈茶組〉条には、次の様な事が記されている。

土産茶 味苦澁不可入口 惟貴中国臘茶并龍鳳团 自賜賣之外 商賈亦通販 故邇來頗喜飲茶 益治茶具 金花烏蓋 翡色小甌 銀爐 湯鼎

皆竊效中国制度 凡宴則烹於庭中 覆以銀荷 徐步而進 候贊者云 茶偏乃得飲 未嘗不飲冷茶矣 館中以紅組布列茶具於其中 而以

紅紗巾幕之 日嘗三供茶 而繼之以湯 麗人謂湯爲藥 每見使人飲盡必喜 或不能盡以爲慢 已 必怏怏而去 故常勉強爲之啜也¹⁵⁾

ここでは、〈茶組〉の内容を詳細に分析する餘裕が無いので、要点だけを指摘することにした。

まず冒頭にみえる「土産茶 味苦澁不可入口」という記述は、理解に苦しみ外はない。

というのは、宋使の来朝した頃に李奎報が吟じた花溪茶所の菴茶は品質が勝れていたからである。

雲峰住老社禪師 得早芽茶示之 矛目爲菴茶
師請詩爲賦之
……師從何處得此品 入手先驚香撲鼻
埽爐活火試自煎 手点花甌誇色味
黏黏入口脆且柔 有如乳臭兒与稚……¹⁶⁾

そして、松都で「商賈亦通販」とあるが、《宋史》の〈高麗伝〉にも、「王城有華人數百 多閩人」とあるから、その中に宋の茶商が有り得ることは、頷ける。

何となれば、高麗歌謠の〈双花店〉によれば、松都には回回翁〈双花餅店主のアラビヤ翁〉。までであったからである。

それから、「金花烏蓋」とは、金花(金彩)黒定の蓋という見解が正しいのである¹⁷⁾。

次に、「翡色小甌」とは、いうまでもなく「青磁小甌」を指すものである。

又、「皆竊效中国制度」とはいうものの、煎じ詰めると高麗が模倣した「定窯は西域系陶磁が支那化したもの¹⁸⁾に外ならない。

次に、「銀荷」が銀の蓮葉形の蓋である事は、〈宋 河南白沙宋墓墓室壁畫〉の中にある銀荷図によつても明らかである¹⁹⁾。

その次に、「日嘗三供茶 而繼之以湯 麗人謂湯爲藥」というのは、「喫茶喫湯」の風俗を表わすものである²⁰⁾。

(三)、中国茶甌の伝来

大叔 華嚴僧統として仕えた寥一法師は、師の姪と看做される明宗(在位：1171～97)に退職の

允許を乞う詩を差上げた。

乞退詩

五更残夢寄松関 十載低徊紫禁間
早茗細合鸞鳳影 異香新屑鶴鵝斑
自燐瘦鶴翔丹漢 久使寒猿怨碧山
願把残陽還舊隱 不教巖畔白雲間²¹⁾

此の中、「鸞鳳影」というのは、茶甌の内壁に鸞鳳の模様を畫いて焼いた吉州窯の茶甌である。

そして、「鶴鵝斑」というのは、鶴鵝の斑点がある建州窯の茶甌ではないかと思う。

この点、博識の士の御教示を請い度い。

(四)、高麗の贈茶

1、契丹

靖宗 4年(1038年) 7月、金元沖をして契丹に腦原茶を贈った。²²⁾

《契丹国志》によれば、その数量は「十觔」であったが、茶名が「腦原茶」となっている。²³⁾

2、金

仁宗 8年(1130年) 3月、盧令珪等をして銀器、茶、布等を贈った。²⁴⁾

3、元

忠烈王 18年(1292年) 10月、洪洗將軍を元に遣わして香茶と木果等を贈った。²⁵⁾

二、使臣迎接の茶礼と茶供

茶礼と茶供に就いては、中国側の使臣が高麗に來朝する場合と高麗の使臣が中国に遣わされる場合を考察したい。

(一)、中国使臣の迎接茶礼

《高麗史》の〈礼志〉に見える茶儀の条りを抜萃すれば次の如くである。

1、北朝の詔使を迎える儀式

王 出坐乾德殿……伝有教賜客省茶酒食
舍人喝 再拜 引出殿門王 就座後 閣門員 引
下節入殿庭 再拜 奏聖體再拜 閣使 伝有教
賜所司酒食 喝再拜 出門訖 進茶 初煮 親勸
使臣 還酬再拜 就座飲訖²⁶⁾

2、大明の敕使を迎える儀式

略叙寒暄 東西對坐 設茶後 王 入内小歇²⁷⁾

(二)、高麗使臣への茶供

《宋史》の〈礼志〉には、高麗の使臣を迎える茶礼に関するめだつ条りは見当らない。

幸いにも、高麗の成均館大司成である崔溘(1287~1340)の〈送鄭仲孚書状官序〉に、茶供の記録が見える。

使始至中國 遣朝官接之境 上所經州府 輒
以天子之命致礼郊 至郊亭 又迎勞 到館撫問
除日支豐腆 自參至辟 錫譙內殿設食 礼賓御
礼 特賜茶香酒果衣襲器玩鞍馬礼物便蕃不
絶……²⁸⁾

三、茶人の交驩

(一)、宋使と麗使の飲茶

徐兢の《高麗図経》には、宋使と麗使が香林亭で飲茶したことが次の様に記されている。

……使副暇日每与上節官属烹茶 枰棋於其上
笑談終日 所以快心目而卻炎蒸也²⁹⁾

(二)、麗元茶人の交流

忠宣王は、即位5年目に王位を長子である忠肅王に譲って、元の燕京に万卷堂を建立し元の碩儒を招待してから、学問と文学を考察するのを楽しんだ。

そこで忠宣王は、彼等に匹敵する高麗の学者を招いた時に、選ばれて行ったのが成均樂正の李齊賢(1287~1367)であった。³⁰⁾

元の學者の中には、鬪茶図の作家として有名な趙孟頫(1254~1322)と〈題蘇東坡墨蹟〉を詠じた虞集(1272~1348)も含まれていた。

尚、李齊賢も名高い茶人で、彼が吟じた茶詩には、次の様な詩句が見える。

松廣和尚寄惠新茗 順筆亂道寄呈丈下
…颯風石砵松籟鳴 眩轉鸞甌乳花吐
肯容山谷託雲龍 便覺雪堂差月兔
相投真有慧鑑風 欲謝只欠東菴句
未堪走筆效盧仝 況擬著經追陸羽…³¹⁾

末句の「况擬著経道陸羽」は、元の国子監と高麗の成均大司成として仕えた李穡(1328~1396)が〈山中辞〉で「鄙陸羽之口饒」³²⁾と吟じたのとは對照的である。

四、百丈・禅苑清規の流転

北宋の宗頤禪師が著わした《禅苑清規》(1103年刊)の一部は、高麗の普照国師(1158~1210)が著わした《誠初心学人文》(1205年刊)の中に、17項目が引用されている。

そして、高宗41年(1254年)には、高麗の分司大藏都監によって、《重添足本禅苑清規》が刊行された。

それから、恭愍王5年(1356年)には、円融府の王師として仕えた太古普愚(1301~1382)禪師によって、《玄陵勅刊百丈清規》が刊行された。

太古普愚禪師は、恭愍王に禅宗の九山門を統合して百丈清規を遵行することを上奏したこともあるが、《禅苑清規》の一部が含まれた《緇門警訓》(1378年刊行)を著わした。³³⁾

参、朝鮮時代

一、茶秧の移入

高宗22年(1885年)8月18日、督辦交渉通商事務の金允植(1835~1922)は、清総辨朝鮮商務の陳樹棠に、九江道からの茶秧(六千株)輸入を依頼した。³⁴⁾

二、茶と茶具の授受

(一)、明から朝鮮へ

明から朝鮮へ移入された茶の数量を知ることについては今後の課題としておきたい。

然し、《朝鮮王朝實錄》に見える出来明使と明朝鮮使節便の輸入品目の中には、白磁羚羊茶鍾や白磁吧茶瓶等が含まれていた。³⁵⁾

(二)、朝鮮から明へ

朝鮮から明へ輸出された茶の公私貿易量は、未だ研究されていないが茶と做会茶飯婦だけは確認されている。³⁶⁾

ところで、《朝鮮王朝實錄》によれば、世宗元

年(1419年)から32年(1450年)迄、明使の劉泉には煎茶具、黄儼には茶三斗、王賢には茶一斗、趙亮には茶二斗。陳敬には銅茶罐、金滿、李祥、昌盛、張奉には茶、王武には茶四十斤、崔・孟氏、金福には茶二十斤、司馬恂には茶匙二部が下賜された。

尙、中国の使臣(明清不問)が滯留中には、正使と副使に毎日雀舌茶十両を支給した。³⁷⁾

(三)、清から朝鮮へ

清から朝鮮へ移入された茶の数量を知り得る限り示せば次の通りである。

1、黄茶と香片茶

張存武が著わした《清韓宗藩貿易》(1637~1894)の〈中国輸出朝鮮貨物〉条には、薬材として黄茶と香片茶が輸入されたことになっているが、その年代と数量とは、記されていない。³⁸⁾

2、茶葉

1885年、大清国通商海関造冊処で編纂された《光緒十一年朝鮮通商三関貿易冊》には、朝鮮に33担74斤(731元)の茶葉が輸出されたと記されている。³⁹⁾

3、茶と紅茶

又、1980年には、7,784斤(2,057円)の茶⁴⁰⁾と1909年には、3,010円(茶⁴¹⁾と200斤の紅茶(漢口産)⁴²⁾が輸入された。

4、燕行使の日供

燕京に滯在中の朝鮮の正副使には、清の光祿寺から毎日三両の茶葉が支給された。⁴³⁾

(四)、朝鮮から清へ

丙子胡乱(1636年)の結果で、朝鮮は清に3年間(1639、1641、1643)に亘って、毎年千包の茶を納めた。⁴⁴⁾

三、宴朝廷使議

朝鮮の都に着いた中国の使臣を迎えた朝鮮王は、太平館で次の様な茶礼を行った。

…司饗院提調一人捧茶瓶 一人捧茶鍾盤
俱入立於酒亭東
捧鍾者提舉二人捧果盤 一人
在西
立於正使之右近南北向 一人立於副使之左近
南北向 使者雖多副使以
下果皆在於左 提調捧果盤立於殿下

之右近南北向 提調以受鍾茶提調跪進于殿
 茶鍾將進殿下起座稍前立酌茶
 下使者起座亦稍前立酒礼同殿下執鍾就正使
 前進茶 正使受鍾權授通事 提調又以鍾受茶
 跪進于殿下 殿下執鍾就副使前進茶 副使受
 鍾

殿下少退 提調又以鍾受茶立進于正使 正使
 執鍾就殿下前進茶提調退從酒亭後詣酒殿下
 執鍾通事以權授茶鍾立進于正使 正使還執鍾
 使者就座 殿下即座舉茶訖 提舉各進使者前
 立受鍾 提調進殿下前 跪受鍾俱復於茶盤 以
 出初舉茶訖 提舉各立進果于使者 提調跪進
 果于殿下訖 俱以盤出⁴⁵⁾

四、使臣の酬唱

中国使臣と朝鮮僑使との間に交された茶詩を引用してみよう。

仁祖11年(1633年)に来朝した明使の副総兵、程龍と接伴使の兵曹參判、辛啓榮が酬唱した茶詩は次の通りである。⁴⁶⁾

晴窗賞梅	程龍
玉梅初綻曉窗晴	精舍蕭然幽更清
可惜新醅成晚熟	龍團雪水煮銀鎗
次韻	辛啓榮
日上梅窗媚晚晴	袋香燒盡有餘清
呼童催煮小團月	颯颯招聲生石鎗

五、茶人の交驛

純祖9年(1809年)、赴燕使行の随員として燕京を往来した金正喜(1786~1856)は、燕京で飲んだ勝雪茶に就いて次の様に偲んだ

茶品果是 勝雪之餘馥陸香 會於双碑館中見
 奴此者 東来四十年 再未見之……⁴⁷⁾

彼は考証学者である翁方綱、院元を始め多くの碩学と交際した。特に李月汀と劉燕庭は、金正喜と金命喜(弟)に茶壺を贈った。⁴⁸⁾

六、茶業富國譚

(六)、明將楊鎬の茶馬交易案

丁酉倭乱も終盤の頃である宣祖31年(1598)、

宣祖は延臣達に次の話を聞かせた。

上曰 楊大人……前日言於余 曰貴國有茶何不採取 使左右取茶来示 曰此南原所産也 歟品甚好 貴邦人何不喫了 予曰小邦習俗 不喫茶矣 此茶採取 売諸遼東 則十斤当銀一錢 可以資生 西蕃人喜膏油

一日不喫茶 則死矣 中国採茶売之 一年得戰馬万餘匹矣⁴⁹⁾

(二)、李鴻章の輸出勸告

1881年、領選使、金允植が北洋通商大臣、李鴻章を訪ねた時に、「泰西不能種茶与養蠶 多種茶茶 可獲大利 速達貴国王 伝諭國中 多種茶茶 爲好」⁵⁰⁾と茶業を勧誘した。

七、茶書が及ぼした影響

清の毛煥文が著わした《万宝全書》の〈茶経採要〉は、艸衣禪師(1786~1866)の《茶神伝》に転載されている。⁵¹⁾

又、清の胡秉樞が著わした《茶務彙載》の製茶法は、安宗洙の《農政新編》に転載されている。⁵²⁾

八、韓國茶道文化の特性⁵³⁾

(一)、模倣文化

1、茶文化の変遷

唐の餅茶は三國に、宋の研膏茶等は高麗に、明の葉茶の加工利用法は朝鮮に伝わった。

2、茶名

高麗の脳原茶、朝鮮の竹露茶、南茶、宝林白芽、金陵月山茶、白雲玉版茶等を除いた總の茶名は、中国から由来したものである。

3、茶具

餅茶の煮茶法を除いた研膏茶の点茶法と葉茶の泡茶法や撮泡法に用いられた茶具も大概は中国の茶具に似ている。

4、茶の風流

唐宋の通水と宋元明の茗戰風習が流入されたことも麗鮮代の茶詩によって考証される。

又、儒仏道教の茶礼も中国から習ったものである。

(二)、再構成文化

1、茶徳

李穆(1471~98)の〈茶賦〉は、唐の劉貞亮が唱

えた〈茶扇十徳〉や日本の明恵上人が唱えた〈茶の十徳〉に此肩される。

2、水質の舌舐

李行(1352~1433)が「以忠州達川水爲第一 漢江中之牛重水爲第二 俗離山三陀水爲第三」と評水をしたのは、張又新の〈煎茶水記〉の品水法に習ったものであろう。

(三)、固有文化

1、花郎の野外用茶具

新羅の花郎は、修行要目である山川遊戯に適する爲、野外用の茶具を考察したのである。

忠談師の携帯用茶具や江陵の茶竈等は、陸羽の〈茶経〉に見える茶具とは異なる。

2、高麗青磁の象嵌技法

宋の太平老人は〈袖中錦〉の中で、「…洛陽花建州茶 高麗秘色 皆爲天下第一」といった。

3、陶磁茶器の黄金比

麗鮮時代の陶磁器を黄金比(1対1. 618) で分析した結果、黄金比と一致するのが大部分であった。

4、茶軍士

南宋には茶商軍という志願兵制度があり、高麗には茶房軍士、茶担軍士、行炉軍士があった。

5、茶禅三味の先唱

日本の三品彰英(1902~71)博士は〈朝鮮のお茶〉の中で、態倉功夫博士(国立民族学博物館教授)は〈煎茶史序考〉の中で、高麗の李奎報の茶詩に見える「草庵他日叩禅居 數卷玄書討深旨 雖老猶堪手汲泉 一甌即是參禅始」が日本に先立つ茶禅一味の主張だといった。

6、茶時の奇俗

貪官汚吏を腐懲する司憲府に於ける茶時の風習は、清白吏精神の發露で美風良俗である。

7、茶童と茶房補任

実学者、李德懋(1741~93)の〈士小節〉に見える茶童教育を始め、民俗画の茶童や寺刹の茶角は皆今日に伝承する風習である。この茶童が成長して科挙に及第すれば茶房勤務から始まるようになっていた。

8、茶信契節目

茶山・丁若鏞(1762~1836)が弟子達と制定し

た〈茶信契節目〉は唯一無二の契であらう。

結 論

韓中茶文化交流を歴史的に考察して、次の様な結論を得た。

1、東洋に於ける茶の加工利用法は、中国から発源して鄰邦に伝わった限り、茶文化の分母は等しいと言えよう。

2、茶文化の分子に該当するものは、茶境と習合された文化形態ともいべきもので、言わば同じ漢字文化圏でも中国には漢字(簡字を含む)、韓国には新作漢字、日本には和字(新制漢字)、越南には字喃があるようなものに譬られよう。

3、今度の研究で解決し得なかった茶と茶具の去来統計等は相互研究が望ましい。

参 考 文 献

- 1) 〈韓・中古典文学比較研究論著目録〉、東方文学比較研究会(編)、《転移と受容》(漢城：学文社、1986)、頁 795~811。
- 2) 李盛雨、〈中韓食文化の交流〉、《韓国食文化学会志》、4巻2號(1989、6)、頁 191~198。
- 3) 崔致遠、〈真鑑禪師碑銘并序〉、《韓国の思想大全集》3(漢城：同和出版公社、1972)、頁 361。
- 4) 崔致遠、《桂苑筆耕集》卷十八、頁 9。
- 5) 韓致濬、《海東繹史》卷二十五、食貨条。
- 6) 《古今圖書集成》二九三卷、頁 32。
- 7) 劉源長、《茶史》卷一、頁 5。
- 8) 陸廷燦、《統茶経》卷下、頁 10。
- 9) 李荇 外、《東國輿地勝覽》卷十七、頁 19~20。
- 10) 李滿敷、《息山外集》卷三、頁 84。
- 11) 青木正児、《青木正児全集》第八卷、(東京：春秋社、1983)、頁 262。
- 12) 徐居正 外、《東文選》第十九、頁 675。
- 13) 李奎報、《東国李相国集》卷三、頁 157。
- 14) 上掲書、卷一、頁 141。
- 15) 徐兢、《宣和奉使高麗図経》卷三十二、頁 1

- 16) 李奎報、前掲書、卷十三、頁 6。
- 17) 伊東楨雄、〈高麗時代の茶碗〉、《陶説》、10號(1954、2)、頁 7。
- 18) 中尾万三、《西域系支那古陶磁の考察》(大連：漢鉄中央試験所、1924)、頁 158。
- 19) 袁旃、《三希堂茶話》(台北：国立古宮博物院、1984)、頁 59。
- 20) 拙稿、〈六大茶類に対して〉第二報 高麗時代、《韓国食文化学会志》4卷2號(1989、6)、頁 159。
- 21) 徐居正 外、前掲書、卷十三、頁 581。
- 22) 金宗瑞 外、《高麗史》卷六、頁 108。
- 23) 葉隆礼、《契丹国志》卷二十一、頁 278。
- 24) 金宗瑞 外、前掲書、卷十六、頁 115。
- 25) 上掲書、卷三十、頁 74。
- 26) 上掲書、卷六十五、頁 137~138。
- 27) 上掲書、卷六十五、頁 141。
- 28) 崔澁、《拙藁千百》卷二、頁 1。
- 29) 徐兢、前掲書、卷二十七、頁 148。
- 30) 金岸基、〈李齊賢の在元生涯に対して〉、《大東文化研究》1輯(1963、8)、頁 219~222。
- 31) 李齊賢、《益齋乱藁》卷四、頁 134~136。
- 32) 徐居正 外、前掲書、卷一、頁 556。
- 33) 崔法慧、《高麗板 重添足本禪苑清規》(漢城：民族社、1987)、頁 469~489。
- 34) 統理交渉通商事務衙門、《清安》九册、高宗22年 7月 9日条。
- 35) 李鉉淙、〈对明貿易〉、《韓国史論》11卷(1982、12)、頁 283。
- 36) 上掲書、頁 277。
- 37) 金指南、金慶門、《通文館志》卷四、頁 27。
- 38) 張存武、《清韓宗藩貿易》(台北：中央研究院近代史研究所、1978)、頁 145。
- 39) 《光緒十一年朝鮮通商三関貿易册》、頁 7。
- 40) 《韓國外国貿易年表》(漢城：関稅国、1908)、頁 181。
- 41) 《朝鮮總督府統計年報》(漢城：朝鮮總督府、1909)、頁 714。
- 42) 《貿易彙報》1號(1909、11)、頁 153。
- 43) 金指南、金慶門、上掲書、卷三、頁 41。
- 44) 張存武、前掲書、頁 25。
- 45) 成宗命編、《国朝五礼儀》卷五、頁 1~2。
- 46) 《皇華集》卷四十八、頁 17。
- 47) 金正喜、《阮堂先生全集》卷三、頁 17。
- 48) 藤塚 鄰、《清朝文化東伝の研究》(東京：国書刊行会、1975)、頁 345。
- 49) 《宣宗大王実録》卷百一、頁 20。
- 50) 金允植、《陰晴史》上(漢城：国史編纂委員会、1958)、頁 55。
- 51) 拙稿、《艸衣茶書の出典考》、《図書館》40卷1號(1985、1・2)、頁 34~48。
- 52) 拙稿、〈農政新編の出典考〉、《韓国食文化学会志》1卷4號(1986、12)、頁 383~394。
- 53) 拙稿、〈韓国茶道文化の特性〉、《韓国食文化学会誌》1卷1號(1986、3)、頁 55~65。